

○吉田公平著『日本における陽明学』

平成十一年十二月、ぺりかん社刊。A5版、273頁。

序 論 日本における陽明学 この章は、本書刊行にあたって書き下ろしたものの。

第一章 日本における『伝習録』

第二章 中江藤樹と陽明学―誠意説をめぐって

第三章 中江藤樹の四書学

第四章 三輪執斎の転向

第五章 江戸期の朱陸論―その由来を論じて一斎・中斎に及ぶ

第六章 日本における『菜根譚』

附 論 王陽明研究史

第一章から附論にいたる7編は、一九八三年から一九九九年にわたって発表されたもので、このうち第一章の「日本における『伝習録』」は、江戸時代における『伝習録』の輸入と受容の様相を、和刻本の刊行や注釈研究といった面から論じ、明治以降の『伝習録』の注釈書に及んだもので、附論の「王陽明研究史」の前段として併せるとより深く詳細な研究史となるもの。なおこの「王陽明研究史」は、一九八六年刊の『陽明学の世界』におさめられたもので、ついで一九八八年の『鑑賞中国の古典Ⅱ 伝習録』にも「鑑賞の窓」に参考文献としてとられ、今回本書にも収められているように、陽明学を研究する者にとって、非常に有益なものである。なお本書に再録するにあたって、7つの条項に補訂を加えられたが、外はあえて補足しなかったと言われる。しかし著者吉田氏自身の『伝習録』（角川書店版、講談社版）これはタチバナ文

庫版でもある）や、大著『陸象山と王陽明』への言及も入れて欲しかった。またこの機関誌『陽明学』や陳栄捷の英文の『伝習録』（コロンビア大学出版部、一九六三年）やジュリア・チン（秦家懿）の英文『求智（知の究明）―王陽明の道』（コロンビア大学出版部、一九七六年）、同『王陽明』（東大図書公司、一九八七年）、杜維明の英文『新儒学の実践（行為における新儒学思想）―王陽明の青年時代（四二―五九）』（カリフォルニア大学出版部）その他は本誌の「紹介と短評」にあるようなもののうち、選んで入れていただくより新しいものも入って充実するのではないかと思う。第二章から第五章までは、江戸期の代表的陽明学者についての論考で、詳しい書評を待ちたい。第六章は、氏が『菜根譚』（タチバナ文庫）の全訳をされるにあたって調べられた研究史と書誌である。陽明学の書ではないが、これまた今後研究する人には、大変有益なものである。

○林田明大著『陽明学と忠臣蔵―不況・逆境に負けない心の鍛え方』（徳間文庫）平成十一年四月、徳間書店刊、342頁。

第一章 陽明学で心を強くする―苦楽合一―

第二章 忠臣蔵の世界―儒学と綱吉の時代―

第三章 赤穂義士と陽明学

以上の3章より成っており、これらは本文庫のために書き下ろされたものだが、第一章は講演の筆録に加筆されたものだけに、特に一般向け。この不況の中でどのように生きるべきかを、実際に陽明学的生き方を実践することで成功した実話である。第二章